

ぶつきょうつうしん しんらん がっごう
仏教通信「イエスと親鸞」12月号

ほんこう ぶつきょうけい がっごう しょう ちゅう こう ぶつきょう じゅぎょう たん ぶつきょう じょうどしんしゅう とど たよう ぶんか せかい しゅうきょう しそう
本校は仏教系の学校ですが、小・中・高の「仏教」の授業では、単に仏教や浄土真宗に留まらず、多様な文化や世界の宗教・思想

じゅうし とく きょう きょう きょう こんかん きゅうやくせいしょ せかいさいだい しんじやすう いう
を学ぶことを重視しています。特にキリスト教・イスラム教・ユダヤ教の根幹をなす「旧約聖書」や、世界最大の信者数を擁するキリスト

きょう せいてん しんやくせいしょ はばひろ と あ じどう せいと しや ひろ じゅぎょう てんかい こんがっき しょうがくぶ ねん ぶつきょう
教の聖典『新約聖書』をはじめ、幅広いテーマを取り上げ、児童・生徒の視野を広げる授業を展開しています。今学期、小学部6年の「仏教」

じゅぎょう おし しょうがい がくしゅう ふか きょうけいようちえんしゅつしん じどう すく じんぶつぞう
の授業では、イエス・キリストの教えと生涯について学習を深めました。キリスト教系幼稚園出身の児童も少なくなく、イエスの人物像に

した おぼ こえ き
親しみを覚える声も聞かれました。

がくしゅう なか じどう しょうかい すがた しょうせつか えんどうしゅうさくし ていじ にんげん
この学習の中で、児童たちに紹介するイエス・キリストの姿は、小説家でありクリスチャンでもあった遠藤周作氏の提示する「人間イエス・

ぞう てほん えんどうし ちよさく せぞくてき いげん けんい しめ きょうしや よわ なや かか にんげん
キリスト」像がお手本です。遠藤氏の著作において、イエスは世俗的な威厳や権威を示す強者としてではなく、むしろ弱さや悩みを抱えた人間と

えが よわよわ よわ みにく ひきょう ころも にんげん てっぺい う い つね よ そ つづ
して描かれます。しかし、その弱々しいはずのイエスが、弱く、醜く、卑怯な心を持つ人間さえも徹底して受け入れ、常に寄り添い続けるとい

よわよわ つよ ころも にんげん とら えんどうし かん えんどうし だいひょうさく かんとく
う弱々しくも強い心を持った人間として捉えていたのが、遠藤氏のイエス観でした。その遠藤氏の代表作であり、マーティン・スコセッシ監督

えいがか ちんもく かん いろこ はんえい さくちゅう しんこう うらぎ よわ ひきょう ころも しんじや
によって映画化もされた『沈黙』には、このイエス観が色濃く反映されていました。作中、信仰を裏切ってしまう「弱く」「卑怯」な心を持つ信者

しんこう す じんしんぶ つみ よわ さいな じゃくしや たい すがた こえ た かれ
キチジローや、信仰を捨てたポルトガル人神父のロドリゴといった、罪や弱さに苛まれる「弱者」たちに対し、イエスの姿と声は絶えず彼らに

あい ゆる おく つづ さくひん つう えんどうし よわ にんげん とも あゆ しんこう ゆ つづ にんげん よわ
愛と赦しを送り続けます。この作品を通じて、遠藤氏は「弱い人間にこそ、イエスは共に歩んでくれる」という、信仰が揺らぎ続ける人間の弱

う い どんじ きょうりかい しめ
さを受け入れる独自のキリスト教理解を示していました。

いっぼう じょうどしんしゅうかいそ しんらんしょうにん おし ちゅうしん ぼんのう さいな みずか ちから じりき かんぜん ぜん さと たっせい むずか
一方、浄土真宗開祖の親鸞聖人の教えの中心にあるのは、煩惱に苛まれ、自らの力（自力）で完全な善や悟りを達成することが難

にんげん げんかい み あみ だによらい ぜったいてき すく たりき きえ たりきほんがん せいしん しんらんしょうにん じだい ちいき こ ふへんてき
しい人間の限界を見つめ、阿弥陀如来の絶対的な救い（他力）に帰依する「他力本願」の精神です。親鸞聖人は、時代や地域を超えて普遍的な

りんりかん ふせつしょう おし りっぼう そんざい わたし にんげん しりしよく にく か さつじん せんそう ひ お
倫理観であるはずの「不殺生」の教えや律法が存在するにもかかわらず、私たちが人間は私利私欲や憎しみに駆られて「殺人」や「戦争」を引き起こ

せいぎ こっか なもと たしや いのち うぼ げんじつ ふか どうきつ たんにしょう ゆいえん ちょ ごうえん
し、「正義」「国家」の名の下に他者の命が奪っていく現実を深く洞察されました。そして、『歎異抄』（唯円 著）の「さるべき業縁のもよほせば、い

ことば つう わたし お じょうきょう かんけいせい あくぎょう おか う あく かのうせい ないほう
かなるふるまひもすべし」という言葉を通じて、私たちは置かれた状況や関係性によって、どんな悪行でも犯し得る「悪」の可能性を内包してい

し さ しょうにん みずか うち あく かのうせい ふか じかく けんきょ む あ あくにん じかく じゅうよう
ることを示唆されました。聖人は、この自らの内なる「悪」の可能性を深く自覚し、謙虚に向き合うこと、すなわち「悪人の自覚」こそが重要で

と じかく じぶん ぜったいてき せいぎ かしん たしや だんざい どんぜん ぬ だ かぎ よわ あくせい
あると説きます。この自覚こそが、自分が絶対的な「正義」であると過信し、他者を断罪する独善から抜け出すための鍵となります。自らの弱さや悪性

たしや よわ かか にんげん みと ゆる かのう しん い み とも い みち
を認められるからこそ、他者をも「共に弱さを抱える人間」として認め、許すことが可能となり、真の意味で「共に生きる」道へとつながります。

わたし えんどうしゅうさくし えが よわ よ そ あい すがた しんらんしょうにん と たりきほんがん せいしん ふか ひび あ おも じりき
私は、遠藤周作氏の描く弱き者に寄り添うイエスの愛の姿は、親鸞聖人の説く他力本願の精神と深く響き合うように思っています。自力に

きゅうさい だんねん じしん よわ あくせい あくにん じかく もの あみ だ むげん じ ひ たりき すく しんらんしょうにん しそう
よる救済を断念し、自身の弱さや悪性（悪人）を自覚した者こそが、阿弥陀仏の無限の慈悲（他力）によって救われるという親鸞聖人の思想。そ

かぎ よわ もの あい そそ すがた ふたり おし かんべき にんげん そんざい つね よわ つみ かのうせい かか
して、限りなく弱き者に愛を注ぐイエスの姿。この二人の教えは、完璧な人間は存在せず、常に弱さと罪の可能性を抱

にんげん かた ぜんてい しん すく こじん つよ どうとくてき どりよく たっせい
えているという人間のあり方を前提としています。真の「救い」とは、個人の「強さ」や「道徳的な努力」の達成ではな

じしん よわ じかく つう ひら あくにん じかく おも みずか よわ あく けんきょ みと
く、自身の「弱さの自覚」を通じて開かれる「悪人の自覚」こそにあると思います。自らの弱さと悪を謙虚に認めるから

わたし たしや だんざい どんぜん はな とも よわ かか にんげん みと ゆる かんが
こそ、私たちは他者を断罪する独善から離れられ、共に弱さを抱える人間として認め、許すことができると考えます。

よわ じかく ね ざ きょうせい せいしん にく たいりつ こ こっか みんぞく しゅうきょう しそう ちが こ へいわ
この「弱さの自覚」に根差した共生の精神こそが、憎しみや対立を超え、国家や民族、宗教・思想の違いを超えた平和

みらい きず だいいっぱ がっしょう がっき しゅうぎょうしき がつ にち おこな しょうがくぶらいはいいいんかい
な未来を築く第一歩になるのではないのでしょうか。 合掌 2学期の終業式は12月20日(土)に行われます。 小学部礼拝委員会

